めぐり、めぐる。サイクル

今年30周年を迎えた武蔵ヶ丘中学校。
地域で支え合いの活動をしている緑ヶ丘区。
この２つには「サイクル」という共通点がありました。
それはまるで自転車のペダルが回るように前へと進んでいきます。
その中には受け継がれゆく思いがありました。

30年間の記憶を刻み、新たなスタートを切る武蔵ヶ丘中学校

武蔵ヶ丘中学校は今年で30周年を迎えました。開校から現在まで、たくさんの生徒たちが過ごしてきた学舎（まなびや）。そこにはさまざまな記憶や思い出がつまっています。
この機会に武蔵ヶ丘中学校を振り返り、これからの道を考えていきましょう。

開校当初の武蔵ヶ丘中学校。
この30年間たくさんの生徒たちを育て、送り出してきた。

開校・菊陽町立武蔵ヶ丘中学校

昭和56年4月1日、武蔵ヶ丘中学校が開校しました。それまで町立の中学校は菊陽中学校のみであり、武蔵ヶ丘地域の生徒たちは菊陽中学校に通学していましたが、人口の増加や地域住民からの要望に伴い、新たな中学校を武蔵ヶ丘地域に開校することになりました。

開校に伴い、武蔵ヶ丘地域に住む新入生と2・3年生は、菊陽中学校から独立した武蔵ヶ丘中学校へ入学・通学することになりました。

開校当初の武蔵ヶ丘中学校は、全校生徒203人の6学級として始まりました。その後、体育館などの整備や、生徒数の増加を想定して校舎も増築され、今の教育環境になりました。現在は681人の21学級で編成されています。

環境

武蔵ヶ丘地域は菊陽町の西端に位置し、熊本市と隣接する地域にあります。昭和48年から武蔵ヶ丘団地への入居が始まり、近年では平成14年から「光の森」地区に住宅が建ち並び、大型商業施設や数多くの店舗が進出し、急速に都市化が進み、町の人口増を牽引している地域です。

武蔵ヶ丘中学校の生徒数も、この人口増に伴い増加していきました。

創立30周年記念式典

10月9日、武蔵ヶ丘中学校創立30周年記念式典が行われました。式典には全校生徒や保護者、来賓の皆さんが出席し、30周年の記念を祝いました。

式では、岩崎良博校長が「輝かしい伝統の上に、新しい伝統をつくっていきたい」と式辞。また、田代PTA会長が「これまでを引き継ぎ、時代にあった活動へ展開していきたい」とあいさつしました。

その後、津軽三味線奏者の髙﨑裕士さんと和太鼓奏者の西口勝さんによる記念コンサートが開かれました。

髙﨑さんから生徒たちに、「心に何か熱いものを一つ持ってください。絶対に役に立つし、人を支え、人に支えられることになります。一緒に頑張ろう」とメッセージが送られました。

生徒たちの心に残る式典になったことでしょう。

武蔵ヶ丘中学校校章

校章の意味

1. 全体の形は武蔵ヶ丘の「M」を表す。
2. 全体の形は学校のマークにふさわしく開かれ、そして重ねられた本の形を表す。
3. 全体の形は地域と共に伸びゆく武蔵ヶ丘中学校を飛び立つ鳥の姿で表現してある。
4. 三本の白線は制服の印象を表す。

INTERVIEW　受け継がれる思い～伝統の上に伝統を重ねて～

第１期生
岩下和高さん

当時は校舎も体育館も未完成でプールもない状態でしたが、何もかもが新品でわくわくしましたね。空き教室もたくさんあったので、遊びには使い放題でした。3年生は51人しかいなかったので、みんな仲が良く家族のようでしたよ。体育祭では組み体操や棒倒しをしていたのを覚えています。

後輩たちの活躍は、卒業生としてとても頼もしく感じています。

今から伝統や歴史を創（つく）っていってもらえればうれしいです。

生徒会長
市原雄太さん

武蔵ヶ丘中学校は活気があり、とても元気で明るい学校です。

わたしは、この学校に通え、大切な友だちと出会えたことを誇りに思います。

30周年記念式典では、全国でも有名な人を間近で見られて、素晴らしい演奏も聞けてとても光栄でした。

これからも武蔵ヶ丘中学校の良いところは継続させて、またいじめや差別などの人権問題はみんなでわかり合って、もっと良い学校になれるようにしていきたいと思います。

岩崎良博校長

我が校では、体育祭のときに日本語と外国語でアナウンスをしたり、その他にもさまざまな工夫をしています。時代の流れに対応できる生徒、また国際的な感覚を持てる生徒に育てたいですね。

わたしたちは地域に開かれた学校を目指しています。そのためには地域の人の手も借りながら一緒に生徒たちを育てていきたいという思いです。

これからも、これまでの伝統を守りつつ、もう一つ新しい伝統を創（つく）り上げたいと思います。

30周年記念式典

吹奏楽部と髙﨑裕士さんのサプライズコラボレーション。

西口勝さんから和太鼓のレクチャーを受ける。貴重な体験ができた。

「日本の和を感じた」
生徒代表からお礼と花束の贈呈。

武蔵ヶ丘中学校が歩んだ30年間の軌跡

昭56	4	菊陽中学校より分離独立 武蔵ヶ丘中学校開校（1年生86人、2年生66人、3年生51人、計203人）6学級
昭57	2	校歌できあがる（作詞：荒木精之先生、作曲：藤枝昭俊先生） 体育館完成（平成元年3月増築）
昭61	2	校舎増築（平成2年3月校舎増築）
平3	4	歴代最高の全校生徒740人、22学級
	9	台風19号により被害が出る
平7	4	「生徒指導総合推進校」（平成7・8年度）文部省指定を受ける
平8	11	文部省指定「生徒指導総合推進校」研究発表会
平10	9	第1回オーストラリア研修生来校（6人）
平12	10	創立20周年記念校内文化祭
平14	11	「光の森」の分譲始まる
平16	12	九州中体連駅伝大会5位入賞
平17	11	熊本県中体連駅伝大会優勝（女子）
	12	第17回九州中学校駅伝競走大会優勝（女子） 第13回全国中学校駅伝大会優勝（女子）
平18	4	文部科学省「平成18年度キャリア・スタート・ウィーク推進地域」指定
平21	11	熊本県中体連駅伝大会優勝（女子）
	12	第21回九州中学校駅伝競走大会準優勝（女子） 第18回全国中学校駅伝大会出場（女子）
平22	3	校舎耐震補強 創立30周年記念式典
	10	

やさしい取り組みを受け継いで前に進んだ緑ヶ丘区

高齢者に「キャリアカート」をプレゼントしている緑ヶ丘区。
前区長からの思いを受け継ぎ、江平区長も安心して暮らせる地域を目指し、積極的に取り組んでいます。

重いごみも楽に運ぶことができる「キャリアカート」。
高齢者のごみ出しの苦労を和らげる。

キャリアカートのプレゼント

「わたしたちは老いることを避けることはできません。いずれは自分の身にも訪れます。それなら、今、わたしたちにできることをやってみよう」。

3年前、前区長の塚田攻（つかだおさむ）さんのときに見守り活動が始まりました。そして、ある事情でごみを出せずに困っている家庭を助けるために、近所の人がその手伝いをしているということを知り、区が高齢者のごみ出しの大変さに気づきました。この気づきが「キャリアカート」のプレゼントにつながったのです。

INTERVIEW　キャリアカートを利用している人たちに話を聞きました。

後藤 節子（ごとう せつこ）さん

わたしがキャリアカートをもらったのは敬老会の前でした。ちょうどそのころ、庭や家の掃除をしていて、たくさんのごみ袋ができてしまったんです。家からごみ収集所まではそんなに遠くはないのですが、やはり何往復もしないといけなくなると考えると、持っていくのが大変だなと思っていたときでした。

キャリアカートをもらったのでさっそく使ってみました。カートにごみ袋を積んでひもで固定し引いていくと楽に運ぶことができました。手で持つのと比べると便利で、ごみ袋が多いときでも運ぶ回数を減らすことができます。いただいて、ありがたいですね。今でもとても助かっています。

宮本 スミ子（みやもと）さん

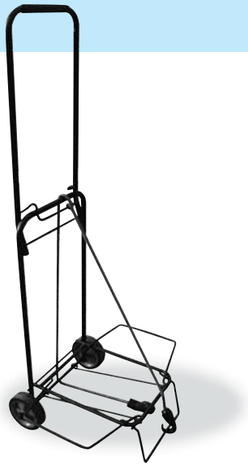
ごみを出すのに手で持っていくのはとても大変だったので、今までは主人かわたしのどちらかが一輪車を使ってごみ収集所までごみを運んでいました。

でも敬老会の前にキャリアカートをいただきました。思ってもいないことだったので、とてもうれしかったです。今ではごみを出す日には必ず利用しています。カートがあれば何でもできるという気さえおきてきますね。

このような取り組みをしていただいて、皆さんにありがとうと言いたいです。カートにも「うちに来てくれてありがとう」という思いです。

これからも大事に使っていきます。

住民同士が輪になって地域で見守り助け合う



緑ヶ丘区長
江平 民生（えひら たみお）さん

わたしは今年区長に就任し、一人暮らし高齢者の安全確保のため、また高齢者にとってやさしい取り組みをしたいという思いに駆られ、前区長のときに行っていた「キャリアカート」の取り組みを引き継ぎました。

カート配布の対象者は、75歳以上で一人暮らしまたは高齢者の二人暮らし世帯です。敬老会の前後に自宅に伺い、カートをプレゼントしました。高齢者の人は、はじめびっくりした様子でしたが、ありがたいと言ってくれました。

ごみ収集の日には、カートを使ってごみを出している利用者を見かけます。利用者はこの3年間で16世帯になり、「ごみ出しが楽になった。とても助かっている」という声をいただいています。

人のつながりが希薄化している現代、区の住民同士が輪になって地域で助け合っていけたらとてもいいことだと思います。現時点では、区の見守り活動費から購入した「キャリアカート」が区の住民みんなで支え合うことのできる最善の策だと思っていますが、例えば、子どもたちが高齢者の人に気軽に声かけなどをしてくれるような、そんなやさしい地域になってくれればうれしいですね。子どもたちとの会話で笑顔も広がり、高齢者の人たちも喜ぶと思います。

今後も話し合いを重ね、より良い活動になるように考えていくつもりです。

困っている人がいればいつでも助けたいと思っています。「キャリアカート」の取り組みに限らず、わたしたちが「人を思いやる気持ち」や「相手の立場になって物事を考える」ことに気づけば、もっと安心して暮らせる地域づくりができると確信しています。

終わりに

サイクルとは本来、「状態が続けて変化し再び最初の状態に戻ること」を意味します。

しかし、ここで紹介した学校や区は、一周して最初に戻った訳ではありません。一周するごとに、さらに前に進んでいきました。まるで、自転車のペダルが回れば前進するように、一歩も二歩も三歩も進んでいったのです。

そのようになったのも、受け継がれゆく思いがあったからに違いありません。「自分たちの学校をより良くするために」、また「地域の人がより良い生活を送れるように」。この思いはいつまでも変わることのない永遠のテーマでしょう。そしてそれは町の願いでもあります。学校、地域、町が一体となって回れば、菊陽町はもっと良い町になっていくはずです。

終わりのないこのサイクルは少しずつ、でも確実につながり、次に受け継がれていくでしょう。